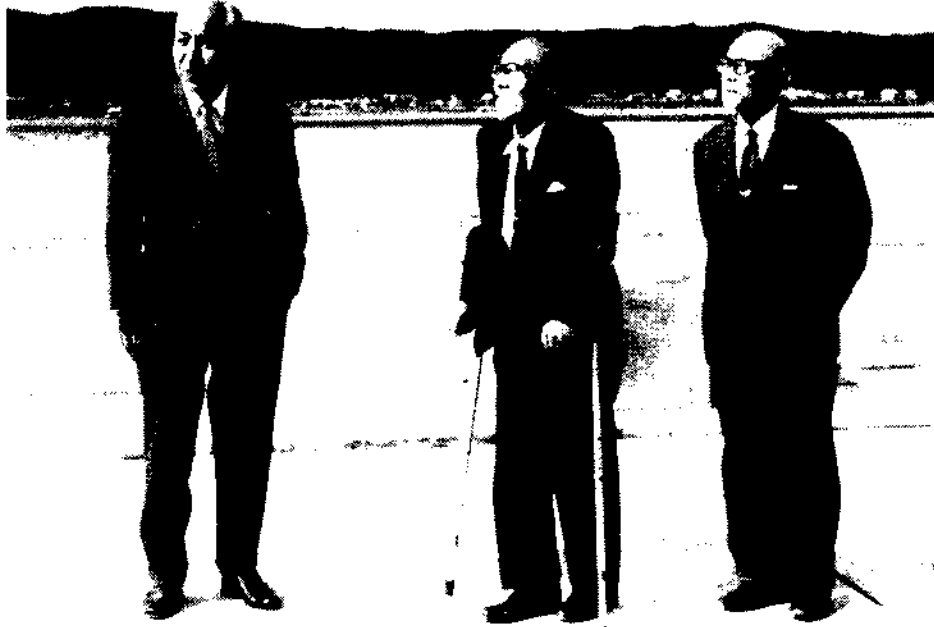


我妻榮記念館

だより



我妻榮博士（中央）が昭和47年10月、1週間にわたって滞在。吉池市長自ら屋上で市の変わりゆく姿を説明。滞在中は、市長車を博士に提供、自分は庶務課や消防署の車を使った。我妻博士はちょうど一年後の10月21日逝去。右端は、米沢中学校時代の同期生本田吉馬氏。共に大正三年卒。

—吉池慶太郎伝より—

第 7 号

発行日/2005年7月1日

発行/我妻榮記念館事務局

☎992 0045

米沢市中央3-4-38

TEL・FAX 0238-24-2211

我妻榮と雨声会

館長 今田久夫

雨声会は我妻榮の米沢中学校（現米沢興譲館高校）同期生の集いであり、児童文学者の浜田広介が名づけたという。会合は主に東京で開催され、我妻榮は縁夫人と共に出席し親交を深められた。

メンバーの一人に、卒業時我妻榮と共に県知事から銀時計を受賞した本田吉馬（元米沢市議会議長）がいる。彼は「追想の我妻榮」に「近年進学率が低下したことに、在京の先輩や地元の有識者から、藩学精神が衰退した」との批判がでたのに対して、五年生の時我妻榮と一緒に校風刷新運動を推進したことや夏休みに二人で徒歩での無銭旅行を実行した楽しい思い出」を記している。

学年のリーダーとしての自覚と責任から校風刷新に立ち上がった結果、翌春の上級学校進学は我妻榮ら三名が一高に合格するなど、刮目すべき成績をあげている。

二高・東大医学部に進み外科の名医と称えられた高橋与市（元中条病院院長・元興譲館同窓会長）も我妻榮を深く敬愛する間柄である。高橋与市は生前「私にとって我妻榮君ではなく、我妻榮先生である。それは中学受験前勉強を教わったからだ。」と。さらに、六十五年の交流に筆舌に尽し難い、厚い友情と数多くの恩恵を受けたと語っている。

なお、高橋与市は現在母校と我妻榮記念館におかれている「我妻榮胸像」の建立に最も尽力された方である。昭和四十八年九月十九日、我妻榮は母校の後輩に講演され、図書館での胸像除幕式に臨んだ後、市内料亭で開催された懇親会に出席された。その折我妻榮の隣りに高橋与市・本田吉馬が坐して、三人は終始笑顔で歓談された姿が想い起される。（筆者も同席している。）

中学時代に切磋琢磨しあった俊秀である本田吉馬・高橋与市が米沢にしっかりと腰を据えて活躍されたことが、我妻榮の生涯に、ひいては母校愛・郷土愛の発揚に側面から寄与したものと考える。

あの日あの時

— 没後32年に当って —

今も鮮明に残る

石田 一郎

昭和三十年頃、興譲館高校に見えられた我妻榮先生の印象が鮮明に残っている。足が不自由で松葉杖をついた品のいいおじさんで、ニコニコしていて親しみを感じた。

東大法学部で岸信介元首相と、二番を競っていたという。講演では「法律は大変むずかしいものだと思いがちだがそれを口頭で説明説得すると意外と解り易いし納得するものだ。それが法律というものである。君たちからいくらむずかしい質問があつたとしても説明できる自信がある。」このように話された先生の言葉は今も覚えていられる。五十年前の話である。

又次郎先生のこと

運営委員 佐藤 英男

我妻榮先生の父君又次郎先生については、既に松野良寅氏の著作「我妻榮一人と時代」で詳細紹介されている。これによると、明治十八年に又次郎先生は米沢中学校の「助教諭心得」として勤務、英語を担当された。小生の父信純も中学校が県立になった明治三十三年に採用され、「助教諭心得」として英語を担当した。したがって小生の父信純と又次郎先生は同時期に英語教師として教鞭をとったことになる。当時の中学校では英語担当の有資格者はごく僅かしか居らず、ほとんどが文部省の教員検定による資格取得者であつた。当時検定合格は決して生易しいことではなく、辛酸をなめる日々を送つたらしい。従つてお互い同様の苦勞を味

わつていたこと故、通ずるものが多かつたと想像される。

因みに向人の在職年は、又次郎先生は明治二十八年十一月から大正十年十月まで、一方父は明治三十三年五月から昭和五年五月までであつた。

くだつて昭和の初めに、当時東京にいた兄が、たまたま上京して来た父から又次郎先生に会いたいので案内してくれと言われ、石神井のお宅を探して同道した。「すぐお暇するから、おまえはここで待つようにな」といつて玄関に入つていった。ところが、なかなか出てこない。何時戻るとも知れないので余所に出掛ける訳にゆかず閉口したとよく聞かされたものである。父も兄も早く鬼籍に入つたいま、父が又次郎先生とどのような話をしたか、兄がはたして何時間待たされたのかも聞く術がない。海やまれることである。

某日の調停委員日誌から

運営委員 佐野 清

某日の午後、裁判所ですが折り入つてお願いしたいことがあるので、お伺いさせて頂きたいので……との電話。

裁判所のご鄭重な電話に目を白黒させ乍ら、それでは私が参上致しますと申し上げ、早速登庁致しますと、新任のI裁判官室にご案内を戴き、お話を承るこことなりました。

私は京都地方裁判所に奉職しておりましたが、このたび米沢に転任を命ぜられ、過日着任致しましたIでございます。ご当地米沢につきましては全く不案内ですので、よろしくお願ひ致します。又わざわざお出向き戴き恐縮に存じます。

実は、高裁から米沢転任の辞令を戴き、地図を頼りに新任地を探しておりますと、東京を遥かに越えての東北地方山形県と判明、これは都落ちかと愕然と致しました。帰宅して家内に説明すること、暗澹とした気持ちで、何か米沢の良さなどを調べてみなければと思案にくれておりますうちに、フと東大在学中

習した民法概論の著者我妻榮先生のご出身地が米沢では？中学は興譲館とか？と思ひ出し、

書棚に飛びつくようにしてご本を探し調べてみますと、成程成程その通り、その米沢で、子供を教育出来るのであれば、孟母三遷の故事もあり、家内も喜んで転任の話を受得してくれらるものと、気を取り直し、急いで官舎に戻り、米沢への話を切り出しました。妻も東大法学部長、民法では世界的なオーストリテイの我妻榮先生の出身地米沢市ね。と念を押し乍ら願ひてくれました。

『本当にホッと致しました』
ご当地に参りまして子供の就学手続きのために市役所に出向きお伺いを致しますと、裁判官官舎は北部小学校学区、丁度川を隔て、向う側は興譲小学校学区とのお話です。子供のために我妻榮の母校に就学させたいと思ひますので、お願ひ致します。』とのお話。

私は、当時市の教育委員長でしたから、越境入学は駄目です。と一言申し上げるべきと心の中で反駁も致しましたが、裁判官ご夫妻の我妻榮への敬慕の念、そして親心の切なさなど胸を打つものもあり……、それでは教育委員会にお話をしてみましようと言う羽目になり、複雑な気持ちで市役所に向かいました。

予感の通り、教育委員会の事務局は苦惱の色濃く、結局は私の



左から 又次郎先生、洋、つる
石神井の新宅にて

我妻榮氏と荒砥

新野 豊松

前書き(当時の書簡から)

米沢市の生んだ稀世の民法学者我妻榮氏がこの世を去って既に十一年余を経過している。過日この我妻氏について熱心な研究を続けている方から「我妻先生と荒砥との関わり等について、とりまとめで欲しい」との依頼を受けた。思えば私自身荒砥における偶然の御縁により、

それまでは、唯慚然として私の話を聞いておられた工裁判官がニッコリ領ずかれて、「私は米沢に就任したことを本当に幸せであったと、今心の中でしっかりと感じることが出来ました。私は自分の任務を自覚する機会にもなり、子供の教育に大切なものは何か、と言うことにも気付きました。

本当に有難うございました。」とお礼の言葉を戴き、私は胸に込み上げるものを感じ、しばらく言葉もありませんでした。や

やあって、我妻先生の孫弟子を自認される工裁判官はやっぱり期待通りの立派な方だ。我妻榮先生は私共市民の象徴ですから、と申し上げますとイヤイヤおはずかしいと含羞される工裁判官。某日の出来事は、私の爽やかな想い出となり、今も鮮やかに蘇るのであります。

「只今我妻榮という方が奥さんと共に、学校においてになりました」という電話が入ったのは去る昭和四十五年十月十八日の午後一時過ぎと記憶しています。丁度その日は日曜日で自宅に居た私に対する用務員さんからの連絡でした。私は「今すぐ学校に出席するから先生に御待ちいただきたい」と返事をしました。ところが折返し我妻先生の伝言として次のような電話が入ってきました。「私が突然訪ねてきたのは、伯父に当る遠藤茂作という者が明治年間に白鷺

一、御縁の発端

町の荒砥小学校に校長として奉職したことがあるので、その肖像写真でもあれば写真を撮らせて頂きたいと思ったからです。幸いその目的を果たし、この後次の予定があるので学校に出席しないようにとのこと。なお予告もなく突然訪ねて来たことのおわびを申しあげると。

このようなことで私はその日先生にお会いすることはできませんでしたが、このことが我妻先生との御縁の発端となったのでした。

二、交信

翌十月十九日早速遠藤茂作校長について、できる限りの資料を整えるべく準備に入った。先ず同氏の経歴書を即日先生の御自宅へ送った。

なお肖像写真は当方でも撮り直すと共に同氏在任当時の児童をさがし、当時の印象等の資料を共に後日送信の予定と附記した。ちなみに遠藤茂作氏は文久元年(一八六一)八月生れ、米沢市北寺町出身の方で荒砥小学校第十代校長として明治三十四年一月十六日から三十九年五月十五日まで在任その後長井小学校長に転じ四十一年まで在任した方であった。

三、結婚のルーツ

昭和四十五年十月十八日(日)この日我妻榮氏と緑夫人がおそ

ろいで突如白鷺町の荒砥小学校を訪ねなされたことについては前号に記載の通りである。之は果してどのようなことに據るものであったろうか。前号に掲載した書簡は我妻榮氏自身の直筆によってこのことを明らかにしたものであった。即ち次のように記されている。

「あの日急に荒砥まで参りましたのは、次のような事情であります。大正十五年の始め私が結婚しますとき伯父の遠藤茂作に東洋音楽学校長鈴木米次郎の三女縁と結婚する旨知らせましたところ、伯父からの返事に、鈴木米次郎という音楽家は記憶に

ある。昔荒砥小学校長の時新進音楽家というので招いて講演をしてみたら。その時鈴木氏は冬の仕度に興味をもち薬グツ薬マントを着用し、自分と。職員と記念の撮影をした。

送ってくれました。まぎれもなく妻の父です。それ以来妻の心に荒砥小学校という名が刻まれました。私はそれより前から伯父がその経歴の中で最初の校長であり、伯父は荒砥での名流婦人とされた想い出を聞かされていきましたので一度は訪ねてみたいと考えておりました。妻と一緒に米沢に帰ります機会は何度もありましたが、いつも忙しいスケジュールで荒砥まで訪れる時間はありませんでしたが、あの日曜日は夕方ので終日何事もありませんでしたので急に思い立って川西町のダリヤ園や小松町の旧友訪問なども兼ねて荒砥まで参りました。——以下省略——この書簡は御二人の結婚の経過の中で共通の想い出を持つ伯父遠藤茂作氏の勤務校であった荒砥小学校を訪ねられたこと、言わば結婚のルーツを求められての訪問で、長い間の念願を果された安堵感さえ感じとられる思いがあった。



我妻先生ご夫妻と荒砥小学校ご訪問 (昭48.9.21)

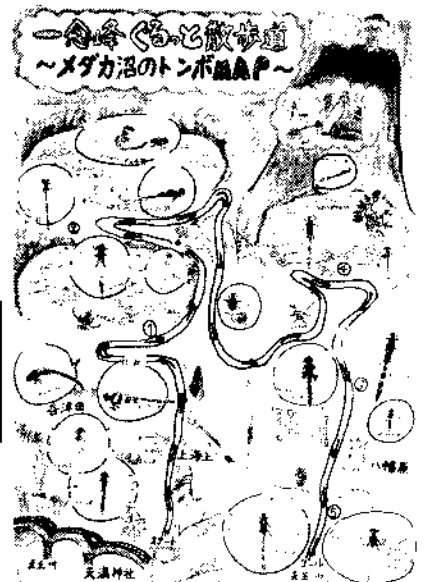
(芳文、八八号より一部抜粋)



我妻榮児童文化賞



第12回、我妻榮児童文化賞の表彰式が2月26日に市内ホテルサンルート米沢で行われました。第21回「自然は友だち 私の自然観察路コンクール」(国立公園



協会、公益信託富士フィルム・グリーンファンド主催)の小学生部門で最優秀賞を獲得した西部小学校6年生の芳賀優紀さん(写真右)と第51回「国際理解・国際協力のためのポスターコンテスト」((財)日本国際連合協会等主催)の小学生部門で最優秀賞を獲得した南部小学校6年大池響子さん(写真左)の2名が我妻榮児童文化賞を受賞しました。おめでとうございます。

私の兄遠藤浩は去る五月五日八十三歳の生涯を終えた。その生涯は我妻榮先生の意志を引き継ぎ、その民法を継承し、法理論の展開研鑽の生涯であった。遠藤浩が我妻榮先生の意志を引き継ぎ、民法学者の道を行ってきた。私には、我が家で語り継がれているエピソードがある。私の父遠藤俊助は明治二十三年、我妻家の斜向いの家で生まれた。現在の園部家で、屋号は金津屋。代々米穀商を営み、家には園部・遠藤の二つの名跡があり、二男の俊助は遠藤の姓を継いだ。



故 遠藤 浩 博士

我妻先生と金津屋

運営委員 遠藤 拓

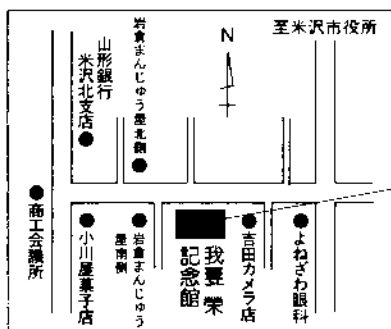
生にとって、恰好な男の子の遊び相手になってくれる兄貴分、魚釣り、相撲とり、水泳と少年の日を過した。

我妻榮先生が東京大学の助教授になられた頃、大正十年遠藤浩出生、父俊助と我妻榮先生との間に、幼き頃毎日遊び相手になって貰った恩返しの意味を含め、将来息子の浩を我妻榮先生の下へよこすようにとの約束事であった。

遠藤浩はその約束通り、我妻榮先生の期待に応え、我妻榮先生の歩まれた同じ道、米沢興譲館中学から第一高等学校、東京大学法学部に進み、我妻榮先生の意志を引き継ぎ同じ民法学者としての生涯を終えたのである。

お世話している人たち

- 名誉館長 我妻 亮
- 顧問 松野 良寅
- 館長 今田 久夫
- 事務局長 小関 薫
- 運営委員 遠藤 拓・小林白紀・佐藤 英男・佐野 浩
- 高橋 節子・本多 和彦
- 梅津 幸保
- 管理人 梅津 幸保



開館日の変更

金曜日、日曜日、月曜日を
開館日とします。

開館時間帯は
金曜日、日曜日が午後1時
から4時まで
月曜日が午前10時から午後
4時までです。

その他の曜日に希望の場合
は、開館日にご連絡ください。
出来るだけご要望に応じるよ
うにしております。

入館料 無料